第二回　民博若手研究会　記録

実施日時：2012 年 4 月 21 日（土）　午後 1 時半から 6 時
場所：第 6 セミナー室
出席者：正規メンバー：足立、飯島、市川、大川、奈倉、比留間、渡会、
　　ゲストスピーカー：松田
　　オブザーバー：窪田、吉田
記録：奈倉

１．前回の議論の整理

「帰還」、「帰還移民」の定義付けについて、修正を共有した。「定住を前提とする」という点を緩く捉えていく。「帰還」は、定住を伴う「帰還」、必ずしも定住を伴わないが、頻繁な往復ではなくルーツ探しを目的とした一過性の「帰還」、または第三国への再移住といった、定住の周辺も事例とし、移住先国で生まれ育った二世代以降の移民が「帰還」という現象がどのように捉えられているかということを考察していく。今後も随時、「帰還」について交通整理を行っていく。

２．発表者１：市川哲（立教大学）

タイトル：家屋・墓地・親族―パプアニューギニア華人の帰還に関する諸実践

＜内容＞

本発表は、パプアニューギニア華人（以下 PNG 華人と表記する）の訪中と中国（大陸）の親族との関わりを事例とし、家屋・墓地・親族に切り口とすることにより、①帰郷と親族関係、②帰郷に伴う義務、③戦略としての帰郷、の 3 つの観点から考察を行った。この事例に基づき、「帰郷」や「帰還移民」という現象を、大川が提示した「入植型」、「出稼ぎ型」から発展させる可能性を模索するとともに、「故郷」に対する因習的な分析枠組みを見直すことの必要性を述べた。

改革開放以降の中国経済の発展や、パプアニューギニアにおける新移民の増加により、自分と中国人を同一化する語りや、逆に中国人と自分とを線引きする語りが聞かれることからわかるように、自己の中国人としての認識を一枚岩で語ることはできない。また、訪中といった場合、祖先の故郷（「籍貫」）よりも北京、上海といったいわゆる有名な都市に観光としていく現象も見られる。このことから、主体により異なる意味をもつ「僑郷」や、国民国家の中国（観光地として有名な中国）と祖先の出身地としての中国という、二重の中国認識を見て取れる。言い換えれば、PNG 華人の中国認識から中国社会のダイナミズムを逆照射することもできる。

訪中に当たり、同姓団体やその中でも言葉が通じる人を頼って出身母村を調べていく状況が見られた。この事例から、親族ネットワークが無条件につながっているわけではなく、

使用できる言語などやキーパーソンによってつながり方が変わるといえる。また、訪中（帰郷）の目的は、それが義務を伴うケース、戦略的なケース、単なる観光のケースなど、当事者によって様々である。むしろその首尾一貫性のなさに注目すべきである。

＜主なコメント・質疑＞

・個別の事例が共通の「帰還」の認識に当てはまるかどうか、ということは気にしなくてもいいが、個別の事例にとって何が重要な要素になってくるのか、ということを考える必要がある。（⇒特定のトピックで分析）
・帰還」「帰郷」の言葉が散らばっているが、統一した言葉使いはいらないのではないか。
・事例から PNG 華人にとっての帰郷は消極的なイメージがする。義務的。精神的な拠り所となっていないのが特徴な気がした。
・社会経済的な階層がある？階層の差によって故郷認識が異なるのか？
・生まれの故郷と家を建てることのテンションの差。なぜテンションが飛躍するのか？故郷に帰るとどのような心理的変化があるか。⇒国内から出された要求を受ける。
・中国と PNG のキャピタルの違い。義務だけで払ったのか？何か得られるものがあったのか？それでアイデンティティを確認しているのでは？⇒愛着、シンパシーも中国にある。故郷に錦を飾る、成功を確認。
・ベトナム北部の村と比較。お墓、お寺などへの投資はあるが、祖先の家を建て直すのはベトナムにはない。
・PNG で祖先祭祀を行っているか？⇒キリスト教化している。同姓不婚の原理も崩れている。
・華人性を感じた。ダイナミックの話。「よき華人」になるという文脈もあるのか？⇒再中国化（知識・イデオロギーなど）、生活レベルでは現地化。
・親族ネットワークの議論が興味深い。帰還した人たちが親族とどうネットワークを築いたか。帰還するためにどうルートを築いたのか。連鎖的に、段階的にネットワークを構築している。これは、帰還移民研究で丁寧に掘り下げていくべき点。
・国際関係（中国と PNG）。行けなかったことに対するフラストレーションが故郷に対する思いを強くしたのか？
・こんなに苦労してもどうして帰郷したいのか？⇒「背負い」？父に聞かされてきた。
・家のデザインは？オーストラリアに対して象徴資本になるのか？中国にいったことが何らかの資本になるのか？

３．発表者２：松田ヒロコ（学振 PD/上智大学、専門は歴史社会学）

＊八重山諸島から台湾へ移動した人の生活史からみる社会関係に注目してきた。現在は沖縄全域に関心を広げている。共著に『石垣島で台湾を歩く』（沖縄タイムズ社、2012 年）。

タイトル：植民地台湾を生きた沖縄人―歴史・記憶・表象

＜内容＞

入植型帰還移民の経験は、「ホスト社会」において、どのように公共的な記憶として想起されるのか、「不可視的移民」とも呼ばれる帰還移民はいかにして可視化されるのか。本発表は、このような問題意識のもと、沖縄から植民地台湾への移動と「帰還」の経緯を歴史的に概観し、沖縄に「帰還」してきた引揚者たちが形成してきた植民地台湾経験をめぐる記憶の共同体の諸相を明らかにした。沖縄系の人々の台湾植民地経験が、戦後、沖縄と台湾においていかに表象されてきたのか、「歴史」そして「記憶」とのズレに注意しながら、沖縄の集合的アイデンティティの形成プロセスについて検討された。

台湾からの引揚げは、比較的スムーズだった。対象となった日本人は上層レベルの人が多く、戦後帰還移民の中で唯一、大量のホワイトカラー層を含んだ集団であった。台湾政府がその一部を留まらせて働かせたケースもあった。引揚当初、当事者たちは沖縄を「故郷」だとは思っていなかった。戦争に負けると思っていなかった人や、本籍地が熊本や鹿児島などの人もいたためである。しかし、「日僑」と「琉僑」に分けられたことによって、突如「沖縄」が現れた。

戦後、沖縄社会は台湾引揚者をどう見ていたのか。沖縄の市町村史によると、沖縄の戦後史の中に台湾移民をみることができず、戦争被害者の位置づけに留まっている。他方で、1940 年代に南進政策が推進されるなかで、「海洋民族としてのアイデンティティ」が形成されるようになった。つまり、台湾引揚者は他者により、「戦争被害者としての沖縄住民」および「海洋民族としての沖縄住民」として、可視化されてきたのである。

＜主なコメント・質疑＞

・「沖縄」という故郷が後から創られていく。引揚者は台湾を故郷とみなしているのではないか、というのは容易に想像ができる（記念碑、交流ツアー：台湾引揚者の故郷に帰る）。でも現在元「内地人」は創られた故郷の沖縄をどうみているのか？⇒世代によって違う。

・同窓会の参加。台湾側の変化と関係。日本人が作った学校。⇒帰国華僑もある！移住先への帰省のきっかけは同窓会への参加が多く、そのついでに親戚を訪問することが多い学校（中華学校、幼少期）の記憶形成の役割に注目する。自分の出自や記憶、体験が肯定されるという経験、印象。

・「沖縄人」というアイデンティティは都市部の男性。差別されてきた人が正統なアイデンティティ（海洋民族、戦争被害者）獲得していく。

・ウミンチュ像建設のお金を払ったのは誰？⇒個人献金は引揚者。台湾企業との関係者。

・228 事件のときの記念碑建設がうまくいかなかったのは？⇒遺族の人が思いを共有できなかった。個人・家族が弔えばいい。国境を越えている人々にとって何か一緒にする場合、マッチする部分が必要。
・八重山はエリート（学歴が高い）、沖縄との差異化を図っている人が多い？⇒沖縄性の記憶。宮古・八重山は深刻な戦争経験がない。
・八重山人は就職先として台湾を選んだ？台湾で沖縄人同志が出会って結婚したケースもあったのか？男性にとっては帰還、女性にとっては違うところに住むようになった？（帰還に対するジェンダー差）⇒同郷者同志が結婚するケースが多いので、ジェンダー差はなかったのでは。例えば台湾人女性が沖縄。移動を繰り返しているので同じ村に帰ってきたから故郷とは言えないのでは。
・いつ可視化されたのか、どのように可視化されたのか。「戦争被害者」として可視化されてきたが、個人にとっての歴史に沿って考えるとある要素は可視化されない。
・帝国主義に対する記憶について。
・引揚者は台湾からだけ可視化されているのか？沖縄からも可視化されているのか？
⇒①海外移民としての沖縄人。②戦争経験者、沖縄以外で。フィリピン南洋群島が一番ひどい。
・可視化は「する」「される」。外から可視化される、記述されることが可視化なのか。分けて考える必要があるのでは？主体的に自らを可視化するのか、外から可視化されていくのか？⇒今日の話は可視化される視点。可視化する例として 1950 年代―70 年代に財産を返せという運動が起きた。植民地の記憶は財産。でも沖縄で盛り上がらなかった。
・台湾からの引揚者として差別されたことはあるのか？⇒差別というか疎外感を感じている。方言が話せない。沖縄社会からみたらよそ者。

おわりに

・「帰還」、「故郷」の概念化を図るうえで、当事者にとって何が本質的な要素となっているか（トピックで分析する）。大川さんの事例の「血」のような。
・歴史認識の変化、モニュメントと記憶の関係、国際関係が故郷認識を作っていく。
・訪問・帰郷の形（実践）の共通性（慰霊団、同窓会、観光）からみえていく観念の共通性があるか？
・どのように戻ってきた人々が浮かび上がってきたか（可視化されてきたか）
・今後も自分の事例が「帰還」とどう対話できるか。